

---

# キノコ城ごと幻想入り

アタナシア=Fate

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キノコ城ごと幻想入り

### 【Nコード】

N8223T

### 【作者名】

アタナシア「Fate

### 【あらすじ】

幻想郷にあのスーパーヒーローが登場します

そのヒーローとは・・・

CAUTION 注意 CAUTION

・これは東方プロジェクト、及びスーパーマリオブラザーズの二次創作です。

設定がすごいことになっています。

・嫁がひどい目に遭うかもしれません。

・駄文。

以上を踏まえた上でお読みください。

byぬーぬ

## 一話

ある時迷いの竹林にどでかいお城が降ってきた。

それはキノコ城と呼ばれる、外の世界の城で

誰かの力で空間がゆがみ落ちてきたのだという・・・

\*|| オリキヤラ設定 ||\*

黒打くろうち 包丁ほうち

あらゆる物を一閃、一貫する程度の能力

殺人の凶器として使われ、呪いの道具だと忌み嫌われていた黒打ち包丁が、

万人の血を吸い妖怪と化した。

何時もは料理好きの小さな女の子で、

寺小屋に潜竹林の竹達をぶっ潰しながら落ちてきた巨大なお城。

無論、最初にこの異変に気づいたのは

竹林の案内屋をしている「藤原ふじわらの 妹紅もいこう」だった。

「…何だこりゃ…」

竹林の深部に位置する建物、

永遠亭を遥かに上回る大きさの「其れ」は

竹を踏み潰し静かに佇んでいた。

取り敢えず妹紅は中に入ってみることにした。

錠前も何もかかっていない扉は、いとも簡単に開き妹紅を招いた。

中にはキノコ頭の生物がうるちよると忙しそうに走り回っていた。

何ともまあ奇妙な光景だと妹紅は思った。

「大変だー… って、 お客さん？

すいません。今お忙しいのです。」

甲高く、更に早口で言葉をぶつけられた妹紅は、返事に戸惑った。

「えー、いや… なあ。お前らの中で、一番話が出来そうな奴…

というか、 城の城主は誰だ？

そいつと話がしたい。」

取り敢えず話が聞きたい。

そう思った妹紅は、キノコ頭の生物に聞いてみた。

「姫のことですかー？

すいませんー、 姫はさらわれましたー。」

キノコ頭は妹紅を見上げて言った。

「さらわれた？ どういう事だ？」

現状が全く理解出来ない妹紅は、聞かずにはいられなかった。

(いきなりどでかい城が竹林に落っこちてきて、

中にはキノコ頭の妖怪がうろちよろしていて、

更にはここの城主がさらわれた？

…今一理解が出来ないな。)

「何、 何時ものことだよ。

姫は大魔王に連れ去られて、僕の兄さんが連れて帰る。

キノコワールドではそれが日常さ。」

全身緑色をした、背の高いひよろつとした男が

妹紅の目の前の階段から降りてきた。

「…キノコワールド？」

「僕達が元々住んでいた世界さ。

君は見たところ、この世界の住人のようだね。

お邪魔してます。」

緑の男はそう言いペコリと頭を下げた。

妹紅は少し考え込んでいたが、 やがて一つの結論に辿りついた。

この者達は「外」から来たのだと。  
んでいる。

## 2話

「…幾つか質問をしてもいいか？」

「構わないよ。」

妹紅はポケットに手を突っ込み、

緑の男に目を合わせた。

「まずはそうだな、

…君達の名を聞こうか。」

妹紅は周りを見渡してから言った。

「僕はルイーダ。そしてこの子達がキノピオ。

そして、えーっと…さらわれたお姫様がピーチ姫。

さらった大魔王がクツパ。焼肉とは関係ないよ。

そして、僕の兄がマリオ。

自分で言うのも難だけど…皆、キノワールドでは有名人さ。」

ルイーダは言い終わってから頭を掻いた。

「そうか…私は藤原妹紅。

お前たちの城が落下した、「迷いの竹林」の案内人だ。

次の質問だが、お前たちのキノワールドと

私達の幻想郷で…一体何が起きたんだ？」

「うん、話すと長くなるんだけどね。

クツパが城に現れて、ピーチ姫をさらったと。

ここまではまあ普通なんだ。

けれど、今度のクツパは誰か「仲間」を連れていて、

姫を抱えたままこの幻想郷に逃げ込んでしまったんだ。

その「仲間」は、空間を引き裂いて此処に行ったように思えた。」

「あー… まあ、纏めて話してくれてありがとう。  
それで、君達はどうかやって此処に来たんだ？」  
妹紅は再び周りを見渡した。  
キノピオ達がせかせかと走り回っている。

「『八雲紫』という人物が、送ってくれたんだ。  
『貴方達の問題なんだから、貴方達で解決しなさい』ってね。」  
「ああ、それでか…」（随分いい加減な所に落としやがったな…  
あのババア…）

同時刻。紅魔館。

「嘘でしょ…？ 何で？  
何で壊れないの…！！？」

「妹様！！！！ 早く逃げてッ！！！！」

「何なのよ… アレは一体、何なのよ！！！！」

ピンクのおさげを揺らしながら、  
悪魔は静かに言った。

「つまんない。」

とうーびーこんていにゅー。 続くんだろうか。

此処は何処だ？  
空気が悪いな。

ああ、ここは森か。

こんなところに落とされるとは思ってもみなかったな。

見渡す限り、木、木、木。 まともに光も入ってこないな。  
助走は充分にあるな。 飛んでみるか。

「あたいは気づいた…

わざわざ湖で待たず、こちらから白黒に挑めばいいと!!

ふふふ、 やっぱりあたいつては最きよ」

ゴスツ

何かにぶつかったか？ まあいいか。

この森はかなり広いようだな… 空気も悪いし長居はしたくないな。  
？ 森の外周あたりに家が建っているな…

行ってみるか。

「おや？ 古道具屋、香霖堂へようこそ。」  
中に入ると、一人の男性が迎えてくれた。

確かに周りには色々な道具が並んでいるが、  
殆ど見たことが無いものばかりだ。

俺は目の前の古道具屋の主人に此処が何処なのか聞いてみた。

「此処が何処か分からないと？ では君は外来人なのか…

無縁塚から落ちてきたのかな？ いや、でも人が落ちてくるなんて

事は皆無に等しい…」

男性はなんだか考え込んでいるようだった。

俺は時間がたつにつれ、記憶を取り戻していった。

キノコ城でピーチ姫がクツパに攫われ、クツパが引き連れていた「仲間」は摩訶不思議な空間を開いた。俺はそこに逃げ込んだクツパを追いかけた。直後、空間は閉じてしまった。

それで俺はあの空気の悪い森にいたわけか。

俺は男性に、これまでの経緯を話した。

「それは本当か!? そんな経緯で此処に辿りついたなんて…いや、それより何故魔法の森の瘴気に耐えられたんだろう? うーん…

…考えるのは後にしよう。質問に答えるよ。

ここは『幻想郷』。人間や人ならざる者達が暮らす地さ。」「幻想郷? クツパもそんな事を言っていたような。

『ピーチはワガハイがいただいた!』

またワガハイの城に監禁すると思っていたら大間違いだ!

貴様らがどう足掻いても辿り付けぬ辺境の地、「幻想郷」へ連れ、ワガハイとピーチは永遠に… ってちょ!?

何をする気だマリオ!? 無駄だ、この空間には結界が張ってあってワガハイと

こいつ以外は入れぬ…

「ならお前ごと中に入ればいいだろう」だと!? そんな無茶そげぶ!!!」

それ以来クツパの声は聞いていないな。

俺と一緒に落ちたはずだが…

俺はここから一番近い、人の住む地域は何処だと問いた。

「人の住む地域? 幻想郷ではそこは『人里』と呼ばれているよ。

ここからはそう遠くない。この道をずっとまっすぐ行けば人里さ。

「俺は頷き、人里へ向かおうとした。」

「あ、ちよつと待った！ 『迷いの竹林』 にとても大きな城が落下したという噂を聞いたよ。」

もしかしたら其処が君の居た城なのかも…

でもあそこはとても迷いやすいから気をつけて…

もう行っちゃった。

しかし、あの格好、あのヒゲ、 何処かで見かけたような？」

今、博霊神社に向けて全力疾走している僕は  
外から来た外来人の男の子

強いて人と違うところをあげるとしたら、

男に興味があるってここかな？

名前はキノ

「おいしそうなのだー」

「アツーーーーー！！！！」

### 3話

近くで叫び声が聞こえた気がする。

古道具屋の主人は言っていた。

「叫び声や悲鳴は、この幻想郷では日常茶飯事さ。

なんたって妖怪やその他もろもろが徘徊しているような場所だからね。

君も気をつけたほうがいい。」

俺は警戒し、右腕に微かな炎気を込めた。

周りが真夜中の如く暗く染まる。

来たか。

「二人目を発見！ 今日には運がいいなあ」

随分暢気なことを言う妖怪だ。

大人しく殺されて喰われる俺じゃあない。

「闇符「ナイトバード」!!!」

うねる様な弾幕が声のする方から放たれた。

幾ら暢気と言えど油断は出来ない。人を喰う妖怪なのだから。

俺は『遠慮無く』火炎弾を放った。相殺出来ない弾幕はマントで

跳ね返す。

「うぎゃー！ー！ー！？」

心の底から引つ張り出したような悲鳴が轟いた。

終わったか？ …早いな。



「何をボーっとしている！ とつとと無縁塚へ行つてこい！！」  
「へいへい、 わかりやしたよ。」  
そんなにあせるこたねえだろ、クツパさんよ。

地下室。

フランは放心したまま動かない。  
レミリアは壁にもたれかかって座ったまま、 矢張り動かない。  
当然だ。

・  
・  
・

フランは生まれて初めて壊され。  
レミリアには、

幻想郷の行く末が視えているのだから。

人里。

「ハイヨー、シルバード！」  
「うぬの力はその程度か！！？」  
「わが名は魔王… 魔王、オディオ…！！」  
「宿屋には絶対行くなでやんすー！！」  
「WRYYYYYYYYY 汚物は消毒だアア！！」  
「コジマは… まずい…」  
「やべシビレ畏切れた」

賑わっている。

何かイベントのようなものでもあるんだろうか？

「おっちゃん、大根3本！ あとキャベツ2玉ね！」

「おう、まいどあり。」

そろそろ例大祭の時期だからなあ… 俺も屋台の準備しとかないけねえかな？」

例大祭？

矢張りお祭り関連の何かなんだろうか。

「おっちゃん、今度は何やるの？」

「聞きてえか黒ちゃん？」

「そうだなー、焼きそばとか焼き鳥とか…」

「…決まってないの？」

聞いた事のない料理名だな。

料理つつつてもこつちじゃカンヅメとかグツグツのスープぐらいだが。

…おっと。何で俺は盗み聞きをしまっているのやら。

「でもなあ、人手が足りねえんだよ…」

「ウホッ、いい男」

通り過ぎようとした瞬間、

おっさんと目があってしまった。

おっさんの放った言葉に悪感を覚えたのは気のせいだろうか？

「お前さんちよいと協力してくれねえか？」

何、例大祭の屋台で人手が足りなくてな。」

おっさんは笑顔で腰に手を当てながら言ってくれた。

どうしようか。 ガスバーナーにでもなればいいのだろうか。

外人だとかそういうのを話すのは面倒だった。

取り敢えず俺は炎を扱うのが得意だということと、  
焼きそばや焼き鳥などそういう料理は全く知らないということ話を話した。

「焼きそばを知らねえだつて？」

うーん… その服装からしてこのあたりの人間じゃなさそうだし、妖怪か？ あんた。でも悪い奴じゃなさそうだよな。」

おっさんは少し悩んでいたようだった。

隣の女の子は包丁をくるくると回している。  
危ない。

「だったらさ、おっちゃん。私がこの人に料理を教えてあげるよ。そしたらガスも使わないで済むし人手も増えるし、一石二鳥じゃない？」

ぱしっ、と女の子が包丁を握って言った。

刃先は俺を向いている。怖い。

彼女は料理が得意なのか？ とおっさんに聞いてみた。

「得意も何も…、彼女はそれがいわば「能力」だからな。教えてもらうといい。」

腕を組んでドヤ顔で言われた。

どうやら参加は決まってしまったらしい。  
困る。

「じゃあ教えてあげるから、ついてきて！」

私、黒打！ 黒打庖丁っていうの。おじさんは？」

俺は彼女に腕を引っ張られながら問われた。

俺の名は…

「マリオ、だ。」

.....



## 4話

「マリオってさ。あんまし喋らないよね。きやべつを神速で切り刻む黒打が言った。必要以上に喋らないだけだと俺は答えた。」

「ふーん。…人間はいいよねえ。気楽に生きて、好き勝手に自分のやりたいことやれてさ。」

それに振り回される道具達の身にもなってみろ、って思うよ。黒打はため息交じりに語りだした。

…過去に何かあったのだろうか。

「いや失礼。ちよいと過去を思い出しちゃってね。」

私は包丁の妖怪なんだ。だから料理も好きだし、いろんなものが斬れる。

マリオは何の妖怪？」

慣れた手つきで黒打は焼き蕎麦を作っていく。

俺は自分は妖怪ではなく、列記とした人間と言った。

「ああ、人間だったの？ 確かに幻想郷じゃ人間と妖怪の区別がないけどさ。」

マリオが元居た世界じゃどうだったの？ 差別だとか、そういうのは無かったの？」

黒打はまるで人間の少女の様な目付きで言った。

…妖怪と人間、か。

俺はそんな差別なんか無く、というか人間らしい奴は殆ど居なかったといった。

「へえ、なんだか面白そう！」

ねえ、このお祭りが終わったらさ、マリオの居た世界の話をしてよ！」

黒打は元気が溢れる様な笑顔を俺に見せた。

俺は ああ、と頷きながら返事をした。

「本当！？ 私、楽しみにしてるからね！」

寺子屋中に響き渡るような大声。

その後、彼女は誰かに呼ばれたのか何処かへ走り去ってしまった。

結局焼き蕎麦の作り方は教わっていない。

「幻想郷は全てを受け入れる。

例え其れが如何なる災厄を招くものであることも」

稗田 阿求

## 5話

「…つまり、クツパは紅魔館を占領して、そこを拠点にしてるつてのわ。」

妹紅の目付きは既に、はじめにこの城を訪れた時とは比べ物に出来ないほど

険しくなっていた。

「…そうだね。それも、最悪の方法で。」  
ルイージが紅茶を啜る。

キノコ城の茶室はかなり広々としているのだが、二人にとってはこの茶室が狭いカプセルホテルの様に思っていた。

「キノコ城にはね。一人の女の子が幽閉させられていたんだ。」  
いつになく真剣な表情でルイージが言った。

「その女の子は凄まじい力を持っていた。  
片手で王国をさら地に出来るぐらいのね。」

### 幻想郷

…この世界つぱく言うと、「全てを滅ぼす程度の能力」、ってところかな。」

再びルイージが紅茶を啜った。

「それはまた、おっそろしい能力だな…」  
妹紅が皮肉交じりに言う。

3秒ほど静寂が続いた。

妹紅にとってはとても長い時間の様に感じた。

「文字通りの、「無敵」さ。敵が居ない。」

…だからこそ、彼女は孤独だった。」  
ルイージの声が少し小声になる。

「なら、どうやってその子を幽閉できたんだ？」

敵が居ないのなら、なおさらだ。」

妹紅が頬杖をついて言った。

既に妹紅の紅茶は冷め切っていた。

「僕の兄さんさ。兄さんが戦った。

片腕もらわれて、脇腹に風穴あけてね。」

ルイージはほぼ無表情に近かった。

妹紅とは視線を合わせず、斜め下を向いていた。

「おいおい、良く生きてるな……」

「兄さんは緑色のキノコ一つあればリザレクションできるからね。

ほぼ不死身さ。」

「…ほぼ？」

「確かに兄さんは生きている。けれど、それまでに何回死んだか。

もうとつくの昔に、兄さんの『人生』は終わってる。

体をとつかえひっかえしてるだけなんだ。

妹紅。君のように、不老不死というわけでもない。

けれど、完璧に死ぬこともない。それが兄さんさ。」

ルイージは目を瞑った。

何時の間にかルイージの兄の話になってしまっている。

路線を戻そうと、妹紅は一つ質問をした。

「じゃあ、あなたの兄貴… マリオが戦い、キノコ城の地下に封印した

その危険生物の名前は、なんて言うんだ？」

「…キノピコ。ピンクのおさげが特徴的な、

可愛い…女の子さ。」

ルイージが薄目を開けた。

妹紅は、その危険生物に対して

ルイージが『可愛い』という言葉を使ったことに疑問を持っていた。

「なあ妹紅。僕からも質問していいかい？」

「…何だ？」

「彼女は、キノピコは…」

「死ぬことで幸せになれるのかな。」

「死ぬことに… 幸はあるのかな？」

ルイージからの質問に対して、妹紅は返答することができなかつた。

外はもう、すっかり日が暮れようとしていた

「号外！、号外だよー！」

人里では、

鴉天狗が新聞を配り回っていた。

俺は何かにつられたようにその新聞を掴み取り、読んでみた。

「紅魔館、占領される！」

という見出しが目立っていた。

「ああ、また鴉天狗のアな新聞か…」

つて、紅魔館が占領だって!？」

隣にいた黒打が驚いた。

俺は紅魔館がどういう所が解らないが、そのまま読み進めていた。

「…スカーレット姉妹を打ち負かす程の強敵がいる。」

- ・メイド達は無事らしい。
- ・私の取材を快く受け入れてくれた
- ・首謀者は、  
クツパ、と名乗る亀の妖怪ー」

そして、次の一文で

俺は付き動いた。

「・スカーレット姉妹を無傷で打ち負かした強敵は  
「キノピコ」と呼ばれているらしい。  
取材中に、危うく私も襲われー」

俺は黒打に、紅魔館がどこにあるのかと問いた。

「え？ 紅魔館ならここから北東にあるけど・・・

マリオ、まさか行くつもり？って、

ちよっ・・・」

北東か。

俺は全速力で走り、マントを広げて北東へ飛んだ。

黒打が何と言っていたかは聞き取れなかった。

やがて、目が痛くなるほどの赤色で染まった館が俺の目に映った。

紅魔館という名前からして、ここで間違いないだろう。

紅魔館には見えないバリアでもあるのか、

飛んで進入することは出来なかった。

仕方なく、俺は門から入ることにした。

門の前には、まがまがしい陰陽玉が居た。

おそらく、こいつがgatekeeper（門番）だろう。

「おっと。もう来たのか。以外に早かったな。」



カードは無くても自動で造る奴もいるけどね。

弾幕ごっこのルールぐらいは、把握しておいたほうがいいと思っよ。

「

「お前さん、スペルカードルールは知ってるよな？」

陰陽球が聞いてきた。

禍々しいそれは微動だにしない。

「まあ、知ってるってことで。とっくと始めよっぜ。」  
同感だ。

|| SET SPELL ||

|| FIGHT! ||

## 5話（後書き）

これで連続投稿は終了です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8223t/>

---

キノコ城ごと幻想入り

2011年10月7日11時00分発行